

女性クレーンオペレーター懇談会開く



東京、神奈川、千葉の重機協同組合

東京建設重機協同組合、神奈川県建設重機協同組合、千葉県クレーン建設重機協同組合の3団体による女性クレーンオペレーター懇談会が11日、東京・大手町のKKRホテル東京で開かれた。東京の組合に加盟する8社から9人、神奈川から1社1人、千葉から2社2人の計12人が参加。経験1年未満の新人から20年以上の運転歴を持つベテランまで、さまざまな経歴を持つ女性オペレーターが一堂に会し、現場でのクレーン作業の魅力や職場環境の改善状況などについて意見を交わした。女性クレーンオペレーター

懇談会は2018年に東京のメンバードで実施して以来、2回目の開催。冒頭、開会を宣言した東京建設重機協同組合の上原則子さんは「各社の社長の方々から皆さん引っぱりだこと聞き、忙しい中を参加いただいたという姿は誇らしく、懇談会を機に職場環境が少しでも良い方向に向かってもらいたい」と述べた。

参加者らが移動式クレーンのオペレーターになったきっかけでは、実家がクレーン関係の仕事で営んでいたほか、家族がオペレーターとして働いていたことなどが大半を占める一方、街中の現場で稼働しているクレーンを見て転職を決意するなど、重機への憧れを理由に挙げる人も目立った。

やりがいについては、「現場で携わった建物が街中に増えていくこと」「自分の成長に合わせステップアップしながらより大型のクレーンに乗れる」「狭い現場の揚重作業で荷を揺らさずに所定の位置に置けた時の喜び」などを挙げた。

現場の環境改善のうち、女性用トイレは東京都内の現場では設置が進んでいるものの、周辺ではまだまだ少なく、近くのビルすることの重要性を指摘する意見も出された。

職場の環境改善など意見交換

利用しているとの声が多かった。女性オペレーターへの偏見では昔に比べたら少なくともたものの、現場監督から「周りが気を使うから（女性は）よこさないでほしい」と言われたケースもあったという。職場環境について、働く女性の出産・育児に対する会社側の理解度は高いとはいえず、休暇制度の整備など環境改善を継続的に働き掛ける必要性を確認。業界の発展に向けてクレーン塾や出前授業を積極展開しながら、女性でも働ける職場だということを広くアピールすることの重要性を指摘する意見も出された。

